珈琲館 story

懐かしい・・という気持ちをあまり持たずに過ごしてきた。
ところが最近いろいろなことが懐かしい。
それは人であったり、物であったり、場所であったりする。
きっと年をとったということなのだ。

喫茶店が好きだった。コーヒーが好きというより喫茶店が醸し出す雰囲気が好きだった。もちろん今でも大好きだけれど、わたしが愛するお店たちは加速度的に失われていっている。わたしは年をとり、私の愛するコーヒー屋さんが失われていくのは、今の若者たちがじっくり腰を据えて人生や恋愛や自分自身を語らなくなり、もっぱら健康志向になったせいだ、と若い人や時代のせいにして怒っている。
渋谷のデュエットが好きだった。駅前のらんぶるも好きだった。新宿の木馬もＤＩＧもスカラ座も、横浜の白鳥もローズガーデンも。
それは喫茶店を懐かしむのではなく、共に過ごした友人たちや若かった自分を懐かしんでいるだけなのかもしれないが。
ところで、ひょんなことから地元で素敵な喫茶店をみつけた。最近健康志向のうさおが「あなた、あのお店やってるよ」と図書館まで歩いていく途中にみつけてきたのだ。
そこには昔懐かしいコーヒー館の香りが漂っていた。地元大口駅から徒歩２分、駅から近いけれど路地を入った裏通りに位置し、緑に囲まれて入口すら判然としない。

そこが「鹿鳴館」。

お客さんなんかあんまりこなくていいんだよ、たまにふらっと誰かが入ってきてくれればね、そんな感じのまま、いつ行っても お客さんはいない。コーヒー一杯 500 円の値段は土地柄にも時代にも似合わないのかもしれない。

でもお店の８７才の店主は、当たり前だがこのお店によく似合う。僕が死んだら店は終わりだという。娘さんがいるそうだが、彼女は跡を継がないのだろうか。

もしもおじさんが死んだら、お店をまるごと買い取ってわたしが店主になるのはどうだろう。近所の友達が喫茶学校に通ってコーヒーを淹れるそうだ。いとこが調理師の免状を持っていたな。ひっそりみんなでそんなお店をやれたらどんなにいいだろう、と最近はひたすらこのストーリーで妄想に耽っている。

まぁ今のところはおじさんが元気にお店を続けてくれることを祈るばかりだが。

懐かしさ漂う世間から少し距離を置いたような喫茶店は、すべて姿を消したわけではない。わたしみたいな愛好家がどこかで息を潜めている。そしてときどきコーヒーを飲みに訪れる。
ひとりコーヒーを飲んでいるとそこが何処だかわからなくなるような、どこかに連れ去られてしまうような、そこだけ区切られて異なった空間を感じる。ある日お店から出たら違う世界に迷い込んでいたりして。

次回はまた違うお店を紹介予定。
古き良き喫茶店が忘れ去られないことを願って。